

教育実践報告

「医療・保健—学校教育の専門職連携で地域の子どもの育ちを支える」

川上ちひろ¹⁾、石原多佳子²⁾、村瀬忍³⁾

1) 岐阜大学医学教育開発研究センター

2) 岐阜大学医学部看護学科地域・精神看護学地域看護学分野

3) 岐阜大学教育学部特別支援教育講座

1. はじめに

近年国内において発達障害を取り巻く状況が日進月歩で変化している。発達障害者支援法は平成16年の制定、平成28年度の改正などの整備が行われ^{1)、2)}、DSM-5の改訂による診断名の見直しがあった³⁾。また初等中等教育における発達障害の特性に合わせた教育や支援方法の開発をはじめとし、就労、行政、福祉や司法などあらゆる領域に影響を与えている。

発達障害に関わる専門職はさまざまあり、対象者の目的やライフステージによって中心となり必要とされる専門職が異なる。発達障害のある児者とその家族の成長を支援するためには、専門職の連携が不可欠である。現場では母子保健と保育・幼稚園、特別支援教育とリハ職との連携などさまざまな実践が始まっている⁴⁻⁶⁾。

学生はそれぞれ発達障害の学習を行うが、障害児や家族のライフステージを横断的に捉えどう専門職が関わるかを統合して学ぶ機会は極めて少ない。また専門職(多職種)連携を体験した授業報告は見られない。学生時代に専門職連携を学ぶことで、将来医療や教育現場で、スムーズに他職種と連携し支援できると考える。今回、総合大学である岐阜大学の特徴を生かし、学部学科を越えた専門職連携教育プログラムを計画し実践したので報告する。

2. 実践内容

授業の目的・目標

学部学科を越えて共通の課題について討論し、それぞれの専門性を生かした関わり方を考えることができる。また、専門職(多職種)連携の重要性が理解できる。

対象学生と授業枠

医学部 医学科5年生8名(臨床実習で小児科をローテート中のグループ)

看護学科保健師課程4年生16名(課外授業として)

教育学部 特別支援学校教員養成課程4年生21名(教職実践演習：必修の一コマ)

協働・協力いただいた教員・専門家など

岐阜大学医学部附属病院小児科 西村悟子・加藤善一郎(小児神経専門医)

岐阜県発達障害者支援センター 富田智子(臨床心理士)、石川里美(精神保健福祉士)

岐阜聖徳学園大学 安田和夫(教授、元特別支援教育学校長)

岐阜県立飛騨吉城特別支援学校 垣添忠厚(特別支援学校教員)

発達障害のあるお子さんを子育て中の保護者（母親）8名
 医学教育開発研究センター、看護学科地域・精神看護学地域看護学分野、教育学部特別
 支援教育講座の教員

授業の準備と流れ

事前準備は以下のように行った。その他、随時メールで情報交換や打ち合わせを行った。
 7月12日：担当教員の顔合わせ、スケジュールの確認など
 9月3日：教材（シナリオ）検討、授業にご協力いただく保護者との顔合わせなど
 10月12日：授業当日の打ち合わせ
 授業スケジュールと内容を以下に示す（表1）。e-learning とワークショップを組み合わせアクティブに学べるよう計画した。

表 1. 授業スケジュールと内容

期間	方法	内容
9月21日 から開始	A:e-learning <ul style="list-style-type: none"> ・学生を学部学科混合の4グループに分けた ・システム上にシナリオ配信し、感想や意見を自由に書き込んでもらった ・グループに各学科教員と外部専門家をファシリテーターとして配置した ・システムは医学教育開発研究センターで利用している「楽位置楽 THE TUTORIAL」を利用した 	1回目のシナリオ配信（9月21日） 自己紹介、シナリオを読んだ感想などを交流（一人1回は発言するよう伝えた） 2回目のシナリオ配信（10月5日） シナリオを読んで感想などを交流（一人1回は発言するよう伝えた）
10月12日 （1.5時間）	B:ワークショップ <ul style="list-style-type: none"> ・学生を学部学科混合の8グループに分けた ・グループには各学科教員と外部専門家をファシリテーターとして配置した ・会場は医学科のチュートリアル室を8部屋使用した 	13:15～13:45 自己紹介、e-learning のふりかえりとまとめ（図1） 13:45～14:30 発達障害のあるお子さんを子育てされている母親との交流（図2） 14:30～14:45 今後自分の専門でできること、まとめ ※授業後アンケート実施
10月12日 以降	C:e-learning	終了後に、e-learning とワークショップの感想交流した

A:e-learning について

2 回にわたりオリジナルシナリオを配信した。

以下にシナリオ概要を挙げ、学生の感想や意見を抜粋する。

☆1 回目に配信したシナリオ☆

Kくんは8歳の男の子で、小学校2年生です。IQが65で、自閉スペクトラム症の診断があり、特別支援学校に通っています。

1歳6か月児健康診査で機嫌が悪く始終ぐずっていましたが、何も指摘されることがなく「このまま様子をみましょう」と言われました。3歳児健康診査では会場で大暴れし、身長計測・視力検査・歯科検診など、ほとんど受けることができませんでした。後日保健センターから、近くの小児科で診てもらうか、発達障害者支援センターに相談に行くといいと言われ、母親は驚きました。

Kくんは保育園の年長になりました。小学校入学前年の10月には、来年4月から通う学校での就学時検診があります。検診でまた大暴れしないだろうかとても心配です。母親は特別支援学校のことを調べてみました。夫に相談したら、沸騰したように怒りました。母親は泣きながら今までの経過や、子育てが辛かったことを説明しました。長時間の話し合いの結果、特別支援学校の見学に行くことになりました。特別支援学校に入学するには「手帳」が必要で、そのため小児科で診察と検査をして診断書をもらいました。

♪討論のための課題♪

以下の課題について、必要だと思うこと、興味があることについて調べてください。

調べたことや自分の感想などを、交流しましょう。一人1回は発言してください。

- ・発達障害の診断や診断基準について
- ・1歳児半、3歳児健康診査の目的、法的根拠、項目などについて
- ・特別支援学校とは、どういった学校か
- ・「手帳」は何を指すのか、またその種類、取得するために必要なことについて
- ・発達障害のある子どもを持つ母親（家族）の心情について、など

3歳児健診の後医療機関や発達障害者支援センターに引き継げていたら、母親の負担も違っていたと思う。将来医師になる身としてこの機会に皆さんと積極的にコミュニケーションをとりたい。特別支援学校の就学基準も種々の発達障害の診断基準も今回初めて知った。知識不足を痛感したので、勉強していきたい（医学科）。

1歳半健診では医師から「様子をみましょう」と発言があったが、保健センターは乳幼児相談を提案するなど、継続して母子に関わることで早期に母親が情報を得る機会が得られたり、一人で抱え込むこともなかったのかなと思った。不安なポイントを見逃さない、気になれば継続的に関わられるように提案していく必要があると思った（看護学科）。

教育の現場で働く時には、母親の辛さや悩みを少しでも軽減できるようにアプローチができるようチームで支援をしていきたいと強く感じた。教育でできる支援と医療でできる支援は異なるが、情報を交換し合い補い合うことでより専門性の高い、個々のニーズに合わせた支援ができると思う（教育学部）。

☆2 回目に配信したシナリオ☆

K くんは特別支援学校に入学しました。担任の先生との話の中で、子ども一人への対応が手厚いことがわかりました。2 学期が始まり、数日すると朝“学校には行きません”と泣き叫ぶようになりました。学校に連絡すると、関係する先生で支援会議が開かれたようでした。

K くんは自宅で大暴れしました。親子は発達障害のクリニックを受診しました。医師は今までの子育てのこと、学校でのことなど、いろいろ聞いてくれました。医師からの説明は、K くんは自閉スペクトラム症で、そのため環境調整や対応方法が重要であることを教えてもらいました。小学校で支援会議が開かれていることを伝えたら、早急に対応してもらえる学校でよかったね、学校と連携をしていきましょうと言われ、つらい中にも少し希望がもてました。

♪ 討論のための課題 ♪

- ・ 発達障害の分類とそれぞれの特徴（特性）について
- ・ 特別支援学校ではどのような専門性の教員が、どのような教育を行っているのか
- ・ K くんが利用できる社会資源にはどのようなものがあるか（サービス、施設など）
- ・ 発達障害のある子どもを持つ母親（家族）の心情について、など

自閉スペクトラム症の診断基準は DSM-5 には以下のように記載してある（省略：診断基準）。このように診断は複雑で、医師だけでは症状が判断しづらいので、障がいをもつ子供にかかわる職種はお互いに情報共有をすることが大切だと感じた（医学科）。

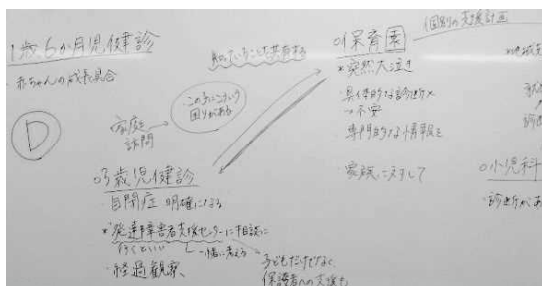
K くんが特別支援学校に入る前の様子についても共有できるよう、地域の保健師もチームに入り情報を共有する必要があると思った（看護学科）。

夏休みは K くんが常に自宅にいたので、学校での生活リズムと変わり戸惑ってしまったのではないかと推測した。安定して生活できる支援を考える必要がある（教育学部）。

B: ワークショップ

最初に e-learning のふりかえりとまとめを行い（図 1）、その後母親と交流した（図 2）。

図 1. あるグループの板書



K くんの成長の経過をまとめた

図 2. 母親との交流



母親の生の声に真剣に耳を傾けていた

ワークショップ後に、今後「自分がやるべきこと」を記載してもらったので抜粋する。

(医学科)

- ・診断や治療だけでなく親御さんへのフォローや、学校や福祉との協力など環境もコーディネートしたい

- ・母親の話を聞く時間を設け、診断を告げるだけでなく寄り添った医療を届けたい

(看護学科)

- ・障害をもつ人々への支援制度や施設を知り、地域の保健師の役割を改めて見直したい

- ・必要機関へ繋げるだけでなく、子どもやご家族の立場を一番に考えて関わりたい

- ・多職種連携を効果的に行うために、他分野の専門性を理解し他分野の知識も深めたい

(教育学部)

- ・子どもの背景はとても深く、学校（教員）から見えづらいこともあるが意識したい

- ・支援センターや検査、診断について知識を深めたい

- ・専攻外の学生に自分の学んできたことを伝えたい

C: e-learning について

ワークショップ終了後、**e-learning** に書き込まれた感想の一部を抜粋する。

自分の知らなかった様々な障害児支援について学ぶことができた。また実際に親御さんから話を聞くことで、保護者同士の繋がりや障害児支援の方々がどれほど心の支えになっているかを知った。今回学んだことをいかしていきたい（医学科）。

保健師は人の一生の発達に関わること、医師は相手が訪ねてこないと関われないことなどを知ることが出来た。ご一緒したお母さんはとても子育てに前向きな方で、お子さんを何よりも愛していらっしゃいました。もし子育てに苦しんでいる方がいたら、このように子どもと向き合えるように、自分に出来ることをしたいと思った（看護学科）。

就学前のお子さんがどのような機関に関わっていて、どのような支援を受けられるかなど知れて勉強になった。多くの関係機関や人と関わって学校へ入学するのだと改めて感じた。保護者は寄り添ってくれる人がいると安心できるので、連携をとりながら保護者と子どもを支援できるよう教職に就いてからも努力したい（教育学部）。

3. さいごに

学部学科を越えて各専門課程の中で授業を組むのは困難であった。しかし e-learning を取り入れ、各学生が都合のよい時間を使って web 上でディスカッションを実施したうえで、ワークショップ（1 コマ）に臨むという形で合同授業が実施できた。同じ大学に在籍していても他学部や他学科の学生が何を学んでいるかをよく知らないことが多いが、今回共通の教育プログラムに参加することでお互いの専門性を知り、自分の専門性をさらに深める必要があるという気づきにつながったようだ。

教育学部の学生は疾患や診断に興味を持って、医療系の学生に積極的に質問していた。医

学部の学生は、特別支援学校の制度や特徴を教育学部の学生に質問していた。どちらも、発達障害のある子どもの生活を考えると必要な情報だと切実に感じたのであろう。多職種が連携するためには、まずお互いの職種を理解し尊重できることが第一歩であり、また本授業（ワークショップ）では子育て中の保護者から、子どもの成長記録や喜び、不安などの生の声を聴かせていただくことで、単なる知識だけではなく、「障害のあるお子さんの子育てをしながら生活している人」を理解する重要さを感じとったといえる。

また、わからないことをすぐに質問したり、職種を越えて尋ねたりするのは、実際の医療や教育の場では難しいと感じることが多いのだが、グループワークで活発な質問ができたのは、同じ学生同士であることでそのハードルが下がり、質問しやすかったのかもしれないと推測する。学生時代から専門職連携が当たり前であり、対等に意見が言い合える体験をすることで、将来専門領域を越えての連携が可能になるだろう。

今回の取り組みが広まり、どの大学でも専門職連携が体験できることを期待している。

この事業は、平成 30 年度大学活性化経費(岐阜大学 COC 事業 地域志向学プロジェクト)の予算で実施した。なお、岐阜大学医学研究科倫理審査(29-242)にて承認を受けている。

この教育プログラムは、医学教育開発研究センター(藤崎和彦、鈴木康之、丹羽雅之、西城卓也、今福輪太郎、恒川幸司、早川佳穂)、看護学科地域・精神看護学地域看護学分野(額瀬朋弥、小林和成、玉置真理子、田中健太郎)、教育学部特別支援教育講座(鈴木祥隆)の協力を得て実施した。

注

1) 文部科学省 発達障害者支援法(平成十六年十二月十日法律第一六七号)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/001.htm (2019 年 1 月取得)

2) 文部科学省 発達障害者支援法の一部を改正する法律の施行について

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/1377400.htm (2019 年 1 月取得)

3) 日本精神神経学会 精神科病名検討連絡会(2014). DSM-5 病名・用語翻訳ガイドライン(初版). 精神神経学雑誌. 116(6), 429-457.

4) 植松勝子(2015). 就学前発達障がい児支援の基盤整備に関する検討. 日本公衆衛生看護学会誌 4(2), 139-147.

5) 中村達也, 他(2014). 特別支援教育における小学校教員と言語聴覚士の連携に関する調査. 言語聴覚研究 11(3), 166-174.

6) 眞鍋克博, 粕山達也(2018). 学校保健・特別支援教育分野における理学療法の現状と展望. 理学療法学 45(2), 134-140.